




光と影



西園寺隆憲





# 目次



育った家の近くに小さな橋があった——小さいといっても車もギリギリ通行できる程度の橋で、もちろん橋の下には川が流れている。ちょろちょろといつも静かな川だ。流れがあるのか淀んでいるのか、見た限りではわかりにくいだが耳をすませば、幽かにせせらぎが聴こえる……

ちょろちょろ……

ちょろちょろ……

僕は子供の頃その橋の下の狭いスペースが好きだった——

強烈な夏の太陽が照らす夏にも、その橋の下は涼しかった。橋の下から焼け付くような田畑を見ていると、じぶんだけが別世界に入り込んだような気分になった。

汗だくになって友達と一日中走り回って、蟬の鳴き声が鎮まる頃に僕は一人で橋の下にもぐりこんだ。もぐりこむと云っても子供が腰を屈めれば歩けるほどの高さはあった。そしてちょうど橋の中心の下に座っていた。足をぶらぶらさせながら、僕は、静かな川の下流に広がる田畑や、町並みを眺めていた。川は南北に流れていたのだから黄昏刻には影になる。見慣れた町並みが赤く染まっているのを、僕は一人で影から見ていた……飽きることなく……影から見ていた。どんどん赤く染まった町が色を変えていく、同時進行で僕の周りだけにある影が外の世界と馴染んでいく……赤から桃色になり、桃色から薄い紫になり、青くなり、黒に近づく……その頃には自分を包んでいた影がどこかにいってしまっ、橋の下には闇が訪れる。もちろん外の世界も闇が訪れているのだが、自分の手もはっきり見えないほどの闇ではない。外の世界には月があり、星がある、そしてちらほらと街灯もある。幸せそうな家から漏れる明かりもある。遠くで電車が走っている音も聴こえる。

ちょろちょろ……

ちょろちょろ……

辺りが闇に包まれると川のせせらぎがうるさくなったような気がした。今思えばそれは錯覚であり、昼間の蟬の声や、道行く人々の話し声も少なくなり、せせらぎに集中できるからである。しかし、その頃は不思議だった。外の世界では普通に夕飯を食べながら、今日あったことなどを話しているのだろう。テレビを見ながら家族で笑っているかもしれない。叱られて泣いている子もいるかもしれない。

でも、僕だけは別の世界からその音に耳を傾けている——

異界への入り口から僕は外の世界の音を感じる――

なぜ.....僕は帰らないのか.....よく思い出せない.....

光あるところには影がある。一寸先も見ることができない闇ではもちろん影すら吸収されてしまう。そこに影は存在しているのか？ 確認できないということは存在していないのも同じだ。闇はある意味優しい。光は影を映し出す・・・影の存在に気づくのは光があるからだ。黄昏時の強烈な光に長く伸びる影は物悲しくもあるが、徐々に闇に溶け込む影は、心地よくもある。

人間は光を求める。栄光であり、幸せ、そんなようなものを求めて生きる。しかし、光を求めれば影が現れるのは自然の摂理だ。恋するという気持ちは強く相手のことを想い、必要とし、理解したくなり、触れ合って、感じあい、愛し合う。

もっと知りたい。もっと一緒にいたい。もっと.....もっと理解したい。愛し合えば愛し合うほど、光が増す。それこそ町並みを焼き尽くす夏の日の太陽のように光が増す。貪欲に光を求め合う――結果として影が鮮明に浮かび上がる。

毎日連絡があったのに、今日はまだ無い  
一週間に一度は食事に出かけていたのに  
他に好きな人ができたんじゃないのか  
大切な二人の記念日なのに仕事  
今日は疲れたから、明日にしてくれ  
私はあなたの何？  
俺はおまえの何？  
イライラする  
信じられない  
裏切り

影は光と一対となって現れる.....闇に包まれている時には一歩二歩と踏み出さなくては見えなかった影が、夏の日の太陽のもとに身をさらすと、途端に鮮明に影が足元にまわりつく。身を焦がさんばかりの灼熱の光は黒い鮮明な影を映し出す。そして、影の存在感は徐々に、徐々に巨大化していく。光の最中にあることを忘れさせるほど巨大化して、光は遠ざかり、闇が辺りを蔽い尽くす.....

橋の下の闇に包まれていると、昼間の熱気が嘘のように感じられる。まるで一人だけ別の世界にいるような、不思議な気持ちになる。歩いてもそう遠くは無い距離の営みが、

何万光年も離れた星で営まれているような錯覚に陥る。

ちよろちよろ.....

ちよろちよろ.....

川面に写っている橋の影が薄っすらと浮かび上がっているが、自分の姿は映らない。巨大な闇にその存在すら飲み込まれたのか？ 存在というものは形があり影があるものなのか？

光が降り注ぐ場所に人間は立たなければ生きてる意味がないのか？

じゃあ.....今の僕は.....ない

必要とされていない

影が.....闇が.....蔽い尽くしているのか？

そろそろ帰らないとおかあさんが心配しているかも.....

昨日もこうしていて怒られたっけ.....

どこにいたの？ 心配してたのよ

いや.....誰も俺のことなど心配はしていない、心配しているのではなく影が気になるだけだ。俺自身ではなく、俺にまわりつく影が気になるだけだ。俺が闇に吸収されたら影はなくなる。今も俺のことを心配しているふりをしながら俺の影を探しているんだ。

俺の影はもう誰にもじゃまされない

影の存在に目を光らせながら愛をつづけ、気持ちだけでは信用できなくなり、人は契約を求め。紙切れに筆記された内容を永遠につづけるという契約書にサインを求め。それが、まるで幸せの契約書であるかのように、親族、友人、神、他人、諸々の関わるモノに宣言する。

光に対して食欲になる。影が見えるのは光あるからであり、光が増せば増すほど、影は鮮明に浮かび上がる。

冬の影よりも真夏の影のほうが鮮明に黒々と浮かび上がる。

そして、光の射す時間が長ければ長いほど、影の現れる時間も長くなる。

その食欲な契約を結婚と呼ぶ。一緒に居るだけで、淡い光に包まれていたものが、淡

い光で満足できなくなり、淡い光が作り出す淡い影に怯え、もっと強烈な光を求める。  
もっと強烈な光は鮮明な影を作り出す。

闇にまぎれている間は影は無い。  
光が影を作り出す。

黄昏刻の影は長く伸びるものである。本体である俺の何倍にも達する。子供の頃は不思議に思ったし、影を追いかけてみたりもした。影に向かって走れども走れども、影は自分の前にいる。追い越すことも、踏みつけることも不可能になる。同じように、電柱の影も、好きだった女の子の影も、友達の影も長く伸びていた。

こうして、この橋の下に座り闇に包まれるのは何年ぶりだろうか.....  
あれから何年も何年も俺は光の射すほうに向かってひたすら走り続けてきた。せせらぎはあの頃同じように俺の耳に届く。

ちよろちよろと  
ちよろちよろと.....届いている

この橋はこんなに小さかったのか.....  
あの頃、巨大な闇と思えたものはこんなに小さかったのか.....  
もう、俺の影を隠しきれないのか.....  
闇に溶け込むことはできないのか.....

心配していたのよ.....早く帰ってきなさい.....  
影を？ もしくは俺本体を？  
何を？

そうか.....契約違反なのか。  
光だけを与え続けることの契約。  
影を浮かび上がらせない契約。  
願いを叶える契約。  
裏切らない契約。  
働き続ける契約。  
会社から給料をもらって帰る契約。  
自分のことは二の次にするという契約。  
子供のために生きるという契約。  
怒らないという契約。



いつも優しくするという契約。

.....すべてにおいて俺は契約違反を犯しているんだ.....

おかあさんはね、いじわるで言ってるんじゃないのよ.....

あなたが心配だから言ってるのよ、早く帰ってきてよ.....

まるで感覚が無い。橋の下に座っているのに、座っている感覚も無い。暑くも無い、寒くもない。まるで闇が影だけでなく俺まで吸収してしまったようだ。ぼんやりと下流に目をやると遠くに街灯が見える。知らない家族の家が灯す明かりも見える。俺は、何万光年も離れたところから、その明かりを見ている。

闇に包まれて見る明かりは、なんて暖かそうなんだろう。

闇に包まれていると、光はなんてうらやましいだろう。

そうか、子供の頃の俺は、それを感じたかったのか。何気ない日常という、帰る場所があるからこそ、帰るべき光があるからこそ、俺は闇に身を潜めていたんだ。待っていてくれる光.....それは影の存在を遥かに凌駕する光。

——どこにいったの？ こんなに遅くまで

——ねえ、おかあさん。外で遊んでいる時は影ができるのに、家に帰ってくると影は無くなるの？

——ふふふ.....変な子ね。影が無いわけではないのよ。天井の真ん中に明かりがついているでしょ、で、部屋の真ん中にあんたが座ってるからよ。それに太陽の光ほど強いわけじゃないからね。ほら、立って足元を見てごらんささい、薄っすらと小さな影があるでしょ？

——ほんとだ.....あるのかないのかわからないだけなのか

——さあ、晩御飯ですよ。おとうさんももう帰ってくるから、つまらないこと言わないで手伝ってね

——はい

今はもう、その場所はない。当たり前だ。俺が親だから、俺が契約書にサインした本人だから。俺が大人だから。俺が貪欲に光を求めたから。常にもっと強烈な光を求めたから。影は濃くなった。黒く、黒くなった。鮮明に。

お隣りさんがね、家を建てて引っ越すらしいのよ  
.....家を建てないと光が射さないのか？

そろそろ塾に行かせないと大学にいけないわよ  
.....大学に行かないと光が射さないのか？

お給料もう少しあったらねえ、早く出世してちょうだいね  
.....金がないと光は射さないのか？

はー毎月毎月、旅行にも行けやしない  
.....旅行に行かないと光は射さないのか？

なるほど、何一つ俺は光を与えていなかったんだな。

家族やかつて愛した妻に、我慢と苦労だけを――影だけを与えてきたんだな。好きなタバコや酒もやめて、朝早く出勤して、夜遅くまで残業して、満員電車に乗り、冷えた夕飯を食べて、シャワーを浴びて、寝て、すぐに起きて、満員電車に乗り.....その結果、影だけを与えてきたのか。

「ん.....」

何かが橋からぶら下がっている。大きなモノだ。軽く揺れている。闇に包まれているのでよく見えない。

ちよろちよろ.....  
ちよろちよろ.....

せせらぎが聞こえる。よく見えないな。じっと見ていると目が慣れて徐々にぼんやりと輪郭が見えてきた。人形？ なのか？ 見覚えのある全体。

ああ.....

ああ、あれは首吊り死体になった俺だ.....  
全身の穴という穴から液体が川面に滴っている.....

ちよろちよろ.....  
ちよろちよろ.....

せせらぎじゃなかったのか。俺の身体から滴る液体の音だったのか。あれだけの液体が人間には入っているのか。終わることないように後から後から滴り落ちる。だらしなく開いた口からは舌がはみ出し、滑稽だ。見開かれた目はこちらを向いているが力がなく、まさしく死んだ魚の目だな。ふふふ.....死んでまで無様なヤツだ俺は。闇が包んでくれているおかげで、月にも星にも照らされず、ひっそりと液体を滴らせている。ああ、もう光が射すこともないし、光を与える必要もないんだ。

その時閃光が俺の目に飛び込んだ、目に飛び込んだだけでなく俺の周りを光が強烈に照らした、目が潰れそうだ俺は光源に向かって手を翳した、

「やっぱりここにいたのね。お義母さんがここじゃないかって.....」

光源は懐中電灯だった。聞き慣れた妻の声が聞こえた。妻は自分の足元を照らして、少し躊躇してから橋の下にもぐりこんできた。そして、俺の隣に座った。二人で並んで座るなんてことは久しぶり、いや、記憶の範囲に無いような気がする。遠い、遠い昔にあったような、無かったような。唯一の明かりを妻は消した。辺りは再び闇に包まれた。さっきとの違いは、隣で息遣いが聞こえるだけで、静かな優しい闇が俺を包んだ。

「もうすぐ桜が咲く頃なのに寒いわね.....」  
「ああ.....」

妻は膝を抱きうつむいて座っている。その姿を月明かりが照らしている。いつもの気丈夫さは欠片もなく、不安そうで、悲しそうで、寒そうな一人の女の子に見えた。

いつも、勢いよく、子供を叱ったり、テキパキと家事をこなして、朝から晩まで俺と子供達の世話に追われて、ブランド物のバッグも持たず、バーゲン品の安物の服を着て、疲れたそぶりもなく、毎日早起きして行ってらっしゃいと大きな声で明るく言ってくれる。綺麗に化粧をして、髪型も整えて、カッコいい服を着ればきっと輝いているのに。もっと違った生き方があったかもしれないのに、俺は、俺は、それを奪ってしまった。俺な

んかと結婚してしまった為に、俺は彼女の人生を台無しにしてしまった。贅沢なんか何もさせてあげれない。

毎日毎日、彼女は、彼女は、生きているのに…… \newline

「あら？ 泣いてるの？」

涙がこぼれていた。

「ふふふ。あなたが泣くのってテレビを見ているときだけだと思ってたわ。私も泣いちゃうかしら……」

「すまない。俺はおまえに何もしてあげていないよ…… どうしようもない男だ…… 何も贅沢させてあげれないどころか、足りない物だらけだ。会社も…… 駄目かもしれない。おまえの大事な、一度しかない人生を俺は台無しにしてしまってるよ。ゆるしてくれ……」

「うわーん！」

突然妻が大声で泣き出した。妻の泣いているところなど、それこそ記憶に無い。涙をポロポロと流しながら妻は泣いている。小さな女の子のように泣いている。橋の下の闇に反響するほどの声で泣いている。俺は、俺は、抱きしめた。

黙って抱きしめる事しかできなかった。妻の涙は俺の首筋を濡らしても濡らしても止むことはないかと思われた。闇は優しく二人を包んでいる。

「ごめんな。泣かないでくれよ。会社……」

「会社なんか辞めればいいじゃない！ 贅沢も別にしたくないわよ！ 何よ！ 私だってね！ 私だって泣きたいし、どうしたらいいかわからないことなんていっぱいあるのよ！ 何も無いのはわかってたわよ最初から！ 何も無いから！ 何も無いから！ 約束したじゃない！ 最初に約束したじゃない！」

「……約束？」

「そうよ！ 結婚する前よ！ あなたと二人で潰れた山の上の遊園地に夜景を見に行った時よ！ あの時もこんなふうに暗いところで二人で座って、約束したじゃない！ 私はずっと！ ずっとその約束だけを守ってるのよ！」

思い出したよ、簡単な約束だった。そう、俺が言ったんだ。

そう、それは、簡単だけど一番大事な約束だった。それは……

——ずっと一緒にいようね——

---

眩しい光と暗い影

---

著 西園寺隆憲

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---